

# 同じ釜の飯食う「家族」

キャンプに滞在中、最も口にした言葉だろう。「バイラルラー」、「ありがと」、「サンキュー」。モンゴル語の日本語、時々英語で交わし合う感謝。砂漠で寝食を共にする調査隊には言葉や文化、価値観の違いを超えたりスペクトがある。合言葉は「eat for someone dish (同じ釜の飯を食う)」。

日本側をまとめる石垣忍岡山理科大生物地球学部教授(62)は言う。「多国籍の隊は別々に食事を取りがちだが、この隊は家族。食卓を囲んで、その日の成果を議論するのが楽しみなんだ」。最多時は39人になる「大家族」の胃袋を満たすのが女性コックのガンチェェクさん(48)とアマルザヤさん(32)。「発掘は体力勝負だからスタミナが付くメニューを考えたのよ」。麺料理のツオイワン、餃子のようなポーズといったモンゴル料理、臭みが独特な羊肉は日本人の口に合うよう味付けに気を配っているという。

期間中、偶然にも4日間で隊員3人の誕生日が続いた。アマルザヤさんが手作りのケーキを食堂のテントに運び、宴が始まる。モン



③ 絆

ゴル産のウオッカ「アルヒ」を酌み交わし、教え教わった歌を夜が更けるまで合唱した。

## 貫禄見せる

ゴビ砂漠南東部の化石産地の一つ、アムトガイの丘の上。モンゴル科学アカデミー古生物学地質学研究所(IPG)の女性研究員

から15ヶ圏内の化石探査に出る。調査5日目のこの日、隊員はこぞってキャンプ地から15ヶ圏内の化石探査に出る。彼女が化石の専門家だ。



宴会の夜はアルヒで乾杯。同じ食卓を囲み絆を深めた

ルスリンさん(34)が親しげに手招きする。辺りに散らばった平らな化石を指さし「白亜紀の亀の甲羅よ。亀はモンゴルの伝承で世界を支えていた、特別な存在なの」。彼女は亀化石の専門家だ。

調査5日目のこの日、隊員はこぞってキャンプ地から15ヶ圏内の化石探査に出る。彼女が化石の専門家だ。

た。過酷な生活に慣れ始めた学生たちも、競うように「獲物」を探し歩く。丘陵上や崖の谷間、干上がった河床など古い地層が露出する場所を歩けば、恐竜の部分骨格や歯、爪はすぐに見つかる。ただ、全身骨格のよつな大物に出くわすことはめったにない。ところがだ。遊牧民の血が流れているからか、モンゴル人の勘は当たる。貫禄を見せたのはIPGのツオクトバートル所長(58)。約9千万年前の地層が広がるバイシンツアフで、ハドロサウルス類の幼体の全身骨

## 隊員 チームワーク抜群

格を発見したのだ。「この地層で幼体は未確認だった。詳しく調べる必要があるが、貴重な標本には違いない」

## 25年の重み

1993年に始まった日蒙共同調査は、抜群のチームワークで数々の成果を上げ、欧米に後れを取っていたアジアの恐竜学を大幅に前進させた。林原時代の2008年に発見した大型肉食恐竜タルボサウルスの子どものほぼ完全な化石は、成長過程を知る手掛かりとなり、北米のティラノサウルスとの比較といった世界的な議論も呼んでいる。「長く続けることは簡単ではなかったが、そうでないと信頼関係は築けなかったし、何も残せなかった」。石垣教授は積み上げた時の重みをかみしめる。ツオクトバートル所長も「25年という時間は研究者人生の半分。分析力に優れた日本チームと一緒にやって来られて幸運だった」。



発掘成果について語り合うツオクトバートル所長(左)と石垣教授。25年来の友人でもある

四半世紀の時が流れ、当初から関わっている研究者は2人だけになった。最近「お互い年を取ったのが再会のあいさつだ。日本とモンゴル、それぞれのリーダーは、両国の絆を受け継いでくれる、後進のことを考えている。(稲垣心也) 随時掲載